

《度談会》

『田辺校地開学に向けて』

— 新しい同志社意識を —

——出席者——
(ABC順)

樋口 秀雄 (大学法学部教授)

今城 淳行 (女子大学教授)

小林 章夫 (女子大学助教授)

前川 嘉門 (大学施設部部長)

仲村 要 (大学経済学部教授)

山本 通夫 (国際高等学校校長)

——司会——

濱田 清夫 (大学文学部教授)

濱田 田辺校地開学が半年後に迫りましたが、先発組の国際高校は別として、われわれの大学ではいよいよ四月から行くんだという実感がもうひとつ乏しいように見受けられます。ここまでするのにさまざまな紆余曲折があり、不安、不満、懸念や躊躇があることは事実ですが、田辺利用は所定の機関で衆智を集めて積み上げられてきた大学の意思決定であり、これが漸く実現することは、この事業に直接かかわってきた者の一人として感慨深いものがあります。折角整理された物的条件を最大限に活かし、教育研究の質的充実向上を旨とすべきだと存じますが、今日は御参加いただきました先生方から、田辺ができるだけ身近に感じられ、三校が新校地に勢揃いすることににより醸成される新しい同志社意識、それを培養土とした同志社独自の創造、というような見通しの明るいお話が何えればと願っております。

新校地利用のいきさつ

まず最初に田辺を利用することになりまして、いきさつについて、すでにあちらで学生をお持ちになっていらっしゃいます国際高校の



樋口 秀雄氏

ほうから、簡単な紹介をお願いします。

山本 国際高校は創立百周年を記念して、その記念事業の一環として設置された、帰国子女受け入れ専門校ということで開校しました。関東にはICUと暁星と二つの帰国子女受け入れ専門校がありますが、関西では同志社が引き受けるということになったわけですね。開校したのが今から五年前、一九八〇年四月です。それから今日まで満五年間、いま六年目へ向かっているのですが、六年にわたって千三百人余の生徒をお預かりして、そして三期に分けて五百人ばかりの卒業生を送ってきました。そのうちの八五%を超える卒業生を同志社大学と同志社女子大学へ推薦進学ということで受け入れていただいて、現在一期生が各大学で三年生になっているという状

況ですね。

開校したのは一九八〇年の四月なんです。が、実際に国際高校の教職員が田辺校地へ参りましたのはその半年ほど前からです。開校準備室ができて、そこを基点にして国際高校づくりを始めたのですが、その当時は今のようない形で造成もされてませんでした、それこそ山の中の奥地に来たといえます、とくに長い間今出川で教育を受け、今出川で教員生活をしていたものにとってはほんとうに島流しにあったような、ロビンソン・クルーソーとはいませんが、なんでこんな所へ来たんやろとまさにそのような思いでしたね。(笑)、おそらく先生方も心を定めておいでになったとしても、二、三年はそういう気持ちをお持ちになると思えますね。空気もきれいだし、自然も広大で美しいし、いままでも名前も知らなかったような小鳥がたくさん飛んできてたり、野ウサギが跳んでいたりしてね。しかも国際高校の生徒が当初一期生は百三十人か四十人ぐらいの数でしたから、ほんとにさびしいというか何をしているのかわからないといった状況でしたね。

しかし、だんだん大学、女子大学の田辺開

学への準備が始められ、そして今日になってきますとすばらしいものですし、国際高校としては、これでやっと同志社が田辺で開学される。五年前から来ているのだけれど、大学、女子大といっしょにほんとの意味での同志社の田辺開学の出発に立ち会えるんだなという気持ちです。早く来てほしいですね。

濱田 いろいろとパイオニアとしての苦労があったと思います。しかし、もう田辺町では文化の目玉だと自慢になっているようですね。

山本 これまで国際高校といいますが、きれいな学校だな、いい学校だな、新しい学校だなと皆さんに言っていたいていきました。が、大学と女子大学が完成して、四月になったら国際高校はかすんでしまいます。規模が違います。大きさが違いますね。

濱田 三校全部揃いますと一万二千か三千ぐらいの人口になるわけですから一つの大きな学園が生まれるということですね。それは大学のほうのことについて前川さんにお願ひできますか。

前川 大学のほうは、特色と申しますと、いま山本先生からもお話がございましたけれ

ども、府道八幡・木津線から東西道路、それから学園橋から南北道路、さらに町道興戸・普賢寺線の大学周辺の道路等が完成し、道路が非常に広いので、キャンパスの雰囲気が一変したのではないかと思えますね。

ご承知のように大学のキャンパスは東西に長く約一八〇〇メートル、南北に約八〇〇メートルという形状になっておりますが、大学が占める総面積は七七ヘクタールで、そのうち一七ヘクタールが現在市街化調整区域で開発協議中ですけれども、五七ヘクタールについては開発の途上でございます。

南北道路に面した西側に正門がありまして、正門からはいってすぐ南側に事務管理棟、正面に図書館、北側に研究室棟、研究室棟の東側に宗教センター、さらに北に実験実



今城 淳行氏

習棟、図書館の南側に教室棟、教室棟2号館の東側に保健センター、図書館の西側に特別教室棟、学内道路を隔てて福利厚生棟があって、さらに西のほうへ行きますと記念大会堂兼体育館、体育研究棟ほか屋外・屋内体育諸施設、さらにブリッジを経て西のほうへ行きますと課外体育のいろんな施設が広がっているというような状況になるわけですね。

大学は非常に面積が広いので、各建物に通じる距離が懸念されるわけですが、教育・研究施設ゾーン、体育施設ゾーン、福利厚生施設ゾーン、大きく分けてこういった三つぐらいのゾーンで機能的につないでいる。とくに大学正門を入れて、その周辺に多くの建物がある機能的につながっているということがいえると思います。いちいち建物の外へ出なくても、ペDESTリアンデッキで各建物に廊下伝いに行き来できるようになっております。たとえば研究室棟から図書館へ、図書館から教室棟へ、教室棟からさらに食堂、購買棟へとというようなデッキ伝いにそれぞれ自由に機能的に行けるといえるところが、いままでの今出川、新町のキャンパスでは見ることができなかった便利さじゃないかと思えます。

さらに各建物の階層が低いということですね。ほとんどが一階、二階、または三階建てになっている。研究室棟のように七階建てで田辺キャンパスの象徴のような形でそびえる建物もございませうけれども、あとはだいたいい言いましたように低層になっており、その点非常に機能的です。とくに一、二、三階建ての中でも一、二階の建物が約七割以上を占めているのを見ましても、潤沢に土地スペースを使っているということがわかるのではないかと思います。建物としては、できるだけ低い建物ということが理想になっているわけですが、そういうことが一つ田辺で実現したということがいえると思います。

それから今出川、新町キャンパスの現在の各建物は、雑居ビルと言えるんじゃないかと思えますね。しかし田辺キャンパスでは目的別の建物になっています。研究室棟であれば先生方の研究室、書庫、閲覧室といったものを中心にとまっています。教室棟は教室だけとまっています。特別教室棟については、視聴覚関係とかコンピューターのTSS関係の先端技術を導入したような教育効果をねらう教室、それからホストコンピューター



前川 嘉門 氏

のスペースをとっているという形でまとまっているわけですね。今出川キャンパスですと、明徳館に食堂もあれば購買コーナーもある、さらに教室もあれば事務室もあるという形でいろんなものが寄り集まっているわけですが、田辺では目的別にまとまった形になっています。

それから校地そのものが雨のほうに緩やかな傾斜をしております、その傾斜を利用して、各レベルごとに建物をうまく均衡がとれるような形で配置しているということですね。さらに四分の一のスペースは緑地で残しておくということです。それから何といいますが、広大な体育諸施設も、教育研究諸施設も同じ場所にあるというのは、日本の大学の中でも数少ない一つになってくるのじゃないかと思えますね。とくに記念大会堂兼体育館、これは五千二百人のスペースを持っておりますので、従来、入学式等は五回にわたって実施していたわけですが、父兄を入れても二回ぐらいでそういった式典を挙行することができるのではないかと思います。教室棟についても一万六千人分ということで、これまで七十数%の回転率で非常に窮屈な形で授業がおこなわれていたわけですがけれども、田辺キャンパスでは五〇%から五五%ぐらいにおさえ、しかも小クラスの教室が多いということ、語学教育、ゼミ教育など小クラスの授業に効果的に活用できるのではないかと期待しております。

そのほかいろいろありますけれども、また追って必要なことは追加させていただきますと思います。

濱田 ありがとうございます。昭和四十一年の第一回用地購入以来、来春でちょうど二十年目ということですね。大学のほうでは山本学長が最初に提案され、五十年十一月に当時の松山学長が創立百周年を期して「研究教育条件の改善基本方針」を提案されてからでもすでに十年になります。私は五十五年

に、木枝先生から整備委員会副委員長を引き継ぎ、三年間直接かかわりました。用地を校地に変える造りだけでも大仕事で時間がかかりました。その点女子大学のほうは非常に短い期間で総意を結集されて田辺利用に踏み切られたという感じがするのですが、今城先生、どうでしょうか。

今城 それではいままでのいきさつのようなことも含めまして、女子大の現在の構想についてお話をさせていただきますが、そもそも出発点には大学のほうとまったく共通の問題として校地の不足ということがございます。

この事が文部省から指摘されたのは昭和四十二年にさかのぼるのですが、それまで女子大学は学芸学部の中に英文、家政、音楽がありました。これを改編しまして、家政学科は充実発展を旨とし、学部になったわけです。そうしますと、学芸学部の中には英文と音楽という非常に異質な学科が残っていて、これは色んな意味で問題がある。たとえば定員ひとつ取り上げてみしても英文は二百五十名、音楽は二十五名というアンバランスな組織ですし、二学科では学芸といっても内容が伴わない、やはり学部学科を再編成して行かな

ければいけないということが長期的に学内の意見としてあったのです。

ところが、家政学科の学部申請の時、校地不足が指摘されまして、それに対しては、直ちに改善を実施する旨、文部省に約束しています。その後も大学院の設置とか定員増を行なう度に約束通り改善を履行するようにと勸告を受けていますが、出来ていない。だから今では、約束を履行して、校地問題を解決しない限り、今出川校地で何か構想を練っても文部省で門前払いということになっているのです。

昭和五十五年には、学部学科の再編成を旨として新学科の計画が決定されました。その前段階として、先ず英文の定員増を、それから音楽の財政的基盤の強化とか内容の充実の



小林 章夫氏

為の定員増と、この両方を学内的に決議しまして文部省に申請の為の打ち合わせに参りました。ところが「あなたの大学は、約束を履行していないではないか。田辺校地があってもあそこには雑草が生えている。何か具体的な利用プランをお持ちですか……」と言われて追い返され、その後の再三の交渉もすべてだめになってしまいました。だから現在実行に移そうとしている構想を仮りに何一つしなくても、教育機関としての約束はこれを履行する義務がありますよ。私などは文部省で追い返された時初めて約束の事実を知らされたし、現在の執行部も知らない人が大半でしたね。基準に対して充分でないことはわかっていました。しかし当時の女子大事務局としては、基準は緩和されて来ているので弾力的に応じられるだろうという見通しを持っていました。とにかくそれ以前に約束事項についての引きつぎが充分でなかったのは問題でしょうね。四十二年以降、田辺校地の利用はどう検討されていたかと申しますと、その年に短大設置を含む教育制度検討委員会もしくは懇談会が開かれています、次の田辺校地検討委員会が開かれたのは、五年後の四十

七年のことです。これを引きついで田辺校地利用委員会が開かれ、次いで四十九年に設けられた短大設立検討委員会が翌年、基本案を教授会に提出しています。五十三年からは新学科検討委員会が発足し五十五年には新学科の新設と音楽の定員増が学内で決められ文部省へ申請の準備を開始したわけです。これが今申しましたように門前払いだったので、五十六年からは、田辺校地利用検討委員会が学芸学部長の高山先生、次いで当時の教務部長の沖中先生を委員長として進められ、五十八年二月にはこの委員会の答申が学内で承認されました。結局、今出川の現状では、今後の充実とか発展は望み得ないことがはっきりしましたし、むしろ手をこまねいていては、社会の変動に対応し切れず、教育機関としての立ちおくれ、更には衰退という事態も容易に予測出来ます。それに、今言いましたような学内的な要望、短大設置の機が熟していたといえること、等が要因となって急速に移転の具体化が進んで行ったと思います。それと、二月の答申承認後、引き続き岡野学長が委員長となって田辺校地利用実行委員会を設け休日も返上して連日、時には深夜まで精力的に



仲村 要氏

審議を重ねて行ったことが、賛否両論渦巻く中で、最終構想を短期間に実行へと結びつけるエネルギーになったんだろうと思います。もしも、学部の改編とか短大の新設というような事が何も無いままに現状を二分して田辺に行くということでしたら今のベースではとても動かなかったかも知れませんですね。

現在の構想としては、まず基本的に将来全学の移転をめざしているということがあります。その第一歩として一、二年次の授業を田辺で行う、こういう構想が打ち出されております。現在の学芸学部を改組して、文学部と音楽学部をつくる。文学部には現在の英文学科と、新しく日本文化学科を設置して、その両学科で文学部とする。それから音楽のほうは声楽学科、器楽学科、理論音楽学科の

三つの学科をもって学部を構成するというプランになっています。音楽は具体的にこの改組に先立って、まず定員増を行い、恒常定員五十名、臨時定員五十名で合計百名にする予定です。それからもう一つ、短期大学部を新しく設置する。短期大学部は後ほど小林先生のほうから具体的な内容をご説明になればと思いますけれども、おおまかなこととしては英米語科、日本語・日本文学科の二つの科で構成するという構想になっております。

具体的な年次計画としては、来年昭和六十二年に短期大学部の開設をいたします。それから音楽学科の一年次から四年次までの授業を同じく来年から田辺で行う予定にしております。その後二年あいだを置きまして、昭和六十三年に英文学科と家政学科の一年次の授業を田辺で開始します。そして昭和六十四年に一年次と二年次の授業が田辺で行われる、そういう予定になっております。

濱田 校地が狭隘だということでは共通ですが、校地不足が問題になったのは昭和四十二年だとおっしゃいましたね。

今城 文部省から指摘されたのがそのとき

です。

濱田 それはすいぶん早いですね。大学の方では従来、定員改正は報告で済んだもので、「昭和五十年度に限り校地面積について弾力的な取り扱いを考慮する」ということで文部省に受理されたのが五十一年三月でした。この定員改正は、その直前の二月に先ほど申しました「基本方針」が大学評議会で決定され、田辺校地利用による自主的教學条件整備の意思が表明されたことを背景として可能となりました。校地不足にもかかわらず「弾力的取り扱い」によって認められたわけですから、そのまま現状維持ならば中心校地問題はなかったといえますが、学問の進歩に合わせて教育研究条件を整備充実することは時代の要求であり、同志社大学でも大学院の充実、工學部の定員改正など、かずかずの懸案を抱えておりました。その後、私立学校振興助成法施行により中心校地充足が特に重要となり、公法専攻科の申請受理に際しては、新校地整備の付帯事項がございました。すなわち、大学設置基準が要求する学生一人当りの面積は十四・九平米であるのに対し、今出川・新町の現有校地は一人当り五・七平



山本 通夫氏

米という過密状態。五十二年二月に評議会で決定された「田辺校地整備基本計画」は工学部と正課体育関係の田辺利用を中心とする構想でしたが、中心校地充足のためには、「基本計画に加えて、一、二年の授業を行う教育・研究諸施設を田辺校地で整備する」ことが必要になりました。

設置基準のことを申しますと、ちょうどひと月前、大学設置審議会が文部省に答申をいたしました。来年度から十八歳年齢人口が非常に増え、六十七年でピークに達します。そうなると定員を八万人ぐらい増やさなければいけないが設置基準で身動きできない。国立でそんなにとれないので、設置基準の要求する校地面積を半分に緩和することにより、私立大学に肩代わりさせようとの狙いがあります。

す。もちろん半分に緩和されても、うちの大学の場合には中心校地問題が解決するわけじゃございません。また、京都市も同志社をはじめ大学がほとんど他所に出てゆく気配に危機感を抱き、建物の高さ制限、その他の規制緩和を遅ればせながら考えておられるようです。私のほうの大学ではキャンパスにバイクが所狭しと並び、学生は授業がない時はもちろん、授業と授業の合い間も街で憩いを求め、ジョギングをする姿すらついぞ見かけたことがありません。

キャンパスライフ

都会型から郊外型へ

そういうことで、これから田辺を利用するということについて、話を全般に向けさせていただきます。本来、キャンパス・ライフというのは学習の場と交流の場の二つからなっており、学習の場で学生が求めますものは成績で表される知的成長と成績に表されないような知的成長だと思えます。また交流の場からは学生と教師、学生同士、学生と職員の間での接触を通して人間的な成長を求めていると思います。学習の場と交流の場とのバランス

がとれて統合的に成長が期せられる場合に、いわゆる全人教育ができるんじゃないかと考えております。これまで狭隘で密室型・都会型の校地だったのが、こんどは広大で郊外型の開放的な田辺の新校地に教育条件が整えられるということになりますと、いままでも十分でなかった交流の場が保証されるという意味で私自身は非常に期待をしているのです。

最近の学生の気質を考えてみますと、学生たちがサボるとか、大学はレジャーランドであるというような言い方をされる一方で、最近非常に学生がまじめになってきて、教室なんかでは出席もよくなったという面もあります。それでもやはり受動的なものです。その点交流の場では能動的で自己表現に情熱を傾け、場合によっては手づくりで自前の活動の場、交流の場を作り出していく。どちらかと申しますと学習の場では均質的な学生ができ上がりつつある。現在個性化が叫ばれているわけですが、交流の場が保証されるようになれば、もっともって活発な自己表現が期待できるのではないかと感じます。知育・徳育・体育が同志社の伝統といわれていますが、いままでもなかつたりっぱな体育施設が田辺に



濱田 清夫氏

できるわけで、体育の場合は、移転ではなく新設であるといえますから仲村先生も非常に期待されていると思いますが。

仲村 正課として考える場合と、課外として考える場合といささか違ふのじゃないかと思えますけれども、正課につきましては今おっしゃっていただいたように、移転じゃないに新設であるということをおぼゆる場所でお願ひしてまいったわけです。結論的にいいますと、田辺移転につきましては同志社の皆様から非常に温かいご理解をいただいたと当事者としては感謝をしております。もちろんいまの時点で、先ほども前川さんがおっしゃいました第四工区の問題は残っているように思いますけれども、計画どおり実施されましたら、少なくとも西日本で同等の施設がある

私立大学は数少ないということができるのではないでしょうか。

と申しますのは、一つは一カ所にこれだけの施設が集まるということですね。それからそれぞれの規模につきましても、とくに面積的に非常に恵まれています。ただ質の問題はまだいろいろあると思えますけれども、計画どおりできますと、まず正課につきましてもいまままで考えてきたことをどんどんやっていきたいし、いけるだろう。課外につきましてもいい条件ができるだろうと思っております。ただ一、二年次と三、四年次が分かれるので相当くふうしなければいかんだろうと思っております。

濱田 いままで体育のほうでは一万坪必要のうち、九〇％は御所なり社会体育施設を使わしていただき、大学として恥ずかしいと、内部からもずいぶん批判があったわけですが、こんどはその問題が解決することになりますね。広大な新校地では、友達がスポーツで汗を流す姿を見れば、億劫な者でもつい釣りがまれるでしょうし、気持ちのうえや精神的な面でいろいろな良い影響があるかと思っております。

ハーヴァードでは、カリキュラムが七九年に改定されましたが体育は必修に入っていないんです。それは体育が必要でないからじゃないに、アメリカではキャンパスが広く、言わなくてもみなやるからです。ワシントンでもモールの周りを男も女も走っている。アメリカ人全体がヘルス・コンシャスといえますか、健康を非常に意識しているのですね。イギリスもスポーツが生活の中にしみこんでいると言われていますが、日本では野球にしても他の何にしても、見るほうのスペクテーター・スポーツが主流ですね。ですから自らプレーするということが、学生の日々の生活に大きな影響があるんじゃないかと思うのです。アーモストにはたしかテニスコートが三十六面あります。

仲村 私は昭和一けた生まれでございますので足るを知りすぎるといいますか、先ほど非常にりっぱなものと言いましたけれども、私もアーモストへ寄せてもらったときにあれを見てまして、これは問題にならないという気がしました。ただ、今の日本の大学の、とくに同志社と同程度の私学の持っている体育施設と比較しますと、こんどの場合には

相当高く評価できると思っています。

新校地に同志社意識を

濱田 先発組の国際高校、そこへ女子大、そして同志社大学が行くということ、一兩年のうち三校が田辺にそろうことになるわけですね。現在、女子大と大学は隣同士、女子中高や同志社中学校も一緒にあるわけですが、お互いによそよそしいとの批判を耳にします。田辺という新しい土地に同志社の人たちがこぞって集まると、何か共通した同志社意識というようなものが生まれてくるんじゃないかと期待しているのですが、そのへんはいかがでしょうか。

山本 今出川キャンパスは、門を閉めてしまえばそれで完全に閉まってしまいます。学生運動のときなどでも、学生たちに門を閉めきられてしまえばそれで完全に封鎖というようなことも起こるわけです。しかしこんどの田辺のキャンパスはそうではない。田辺のキャンパスの中を天下の公道が走っている。だからパトカーも絶えず巡回できるような状況なんです。いままででは今出川キャンパスは、狭かった。狭かっただけではなく、今出川キ

ャンパス地域全体で完全に隔離した垣根があって、その中でまた大学・女子大学・女子中高・中学の四つがお互いに垣根をつくりあって、お互いを入れ合わなかったというようなところがありません。田辺のキャンパスでは、各校がそれをしようと思ってもできません。

それともう一つ国際高校はまったく無からの創造でした。既存の学内中高には、いろいろな長い歴史と伝統があり、そういったものが何もないで、むしろ、同志社、というふうなものがない状況の中で、とにかく帰国子女受け入れ専門校としての中学校と高等学校の六年間の学校づくりをしていくということ、やってきたのです。ですから大学に対しても女子大に対しても、こんなこと言ったら語弊がありますけれども、既存の中高のようないろんな形が、女子大に対して思いをぶちまけることもできるし、また大学や女子大のいろいろな考えを、ああ、そうか、というふうな形で受けとめることもできるので

す。
ですから濱田先生が先ほど言われたよう

に、ほんとにここで国際高校を底辺に置いた大学と女子大の三校から成り立つ、田辺同志社、というものができるのではないのでしょうか。そしてそれは、今出川にいままであったような狭いと言ったら語弊がありますけれども、そういった同志社のカラーじゃなくて、新しいものが生まれてくるような気がします。ぜひそうあってほしいと思います。カリキュラムだとか教学の面からの一貫教育はもちろんのこと、ほんとうにトータルな意味での同志社一貫という、そういうようなものがつくられていくのではないかと、期待しているのですが。

濱田 私もそれを期待しているわけですが、一、二回生が行きますと胴体で二つに切られ、総合性が失われるというデメリットの面がよく強調されます、新しい所に行けば、おのずから意識の変革が行われると思いません。

現在でも大学と女子大の間に学生同士のいろいろな交流はあるわけですね。ですから田辺に行けば学生たちが自発的に高校、大学、女子大間で交流の場を広めると思っています。

短期大学部ができると二つの四年制大学に

二年制のものが加わるわけですから、国際高校の学生にとって、大学への進み方も多様な選択の幅が与えられるという面でのメリットもありますね。また帰国子女を受け入れたということとはわれわれにとっても非常に新しい意味を持ちます。この間、国際高校で教育実習をした私のゼミの学生は、ペルーからの帰国生が昼食時にワインが出ないと言員室になり込んだので驚いたと話していました。ちょっと日本の高校の常識では考えられないことですね。

こんど大学の一、二年が田辺に参りますと英独仏中西露の授業がむこうで行われるわけですが、先生も学生もそういう学生と直接接触し、言葉だけでなく、異質文化の理解の面でお互いに得るところが大きい感じがします。樋口先生は一、二年がむこうへ行くということでご苦労なさっているわけですが、いまのような話との関連で何かございましたら……。

樋口 先ほど金城先生のお話を聞いておりました、女子大の場合には最終目的として全学移転というものをいちおう念頭に入れていく。ところが大学の場合ですと、先ほど濱田

先生からの説明がありましたように、当初の工学部移転というものが変化して、付随的に起こってきた一、二年移転というものが主目的になっていったわけですが、なおかつ最終目的として全学移転というふうなことは一回も議論されたことがないわけです。

仲村先生からちょっと指摘がありましたけれども、一、二年生が永久にむこうに移転して、そのままずっと教育体制が固定するということに対しては私は強い疑問を持っておられます。たとえば山本先生のご指摘になりましたように学校間の交流というものが当然起こってくるでしょうし、それに伴って国際高校の生徒たちが得る利益というのはかなり大きなものがあるんじゃないか。ところが大学の場合ですと、一、二回生だけ、三、四回生だけというふうにかたまっている。そして二年が終わって今出川に来るということになりましたと、友達関係というのが一年だけということになるわけですね。そういうのと一年から四年までずっと上級生がいる、下級生がいるという雰囲気とは、知能の面でももちろんでしょうけれども、精神的な、あるいは心理的な発達面で非常なマイナスになるんじゃないかという懸念を強く持つわけです。

しかしこれは幸いにして中長期教学検討委員会という、十年後ぐらいのめどで新しい同志社を構築する委員会がすでに発足しておりますので、それに期待をしておるわけですが、暫定的なものとして、少なくともそれまで教学条件が低下しないということですが、われわれいちはん願っていることなんです。とくにこの十年間に教学条件がプラスになるというふうなことはあまり大きく望めないのではないかと。しかし、だからといって手をこまねいているわけにはいけません。少なくとも教学条件があまり悪くならない、少しでもよくなるという方向で考えていかなきゃいけないというふうにわれわれ思っているわけです。

幸いにして同志社の場合ですと今出川から田辺ですら約一時間という距離で、東京なんかの移転した大学に比べますとかなり近いということにはなるのですが、しかし少なくとも半数の学生がむこうに行くということですから、よほどきちんとした教学体制を組む、あるいは事務体制を組むという形をとらなければ、教学の充実ということはむづかし

いのではないかというふうに当初から実は思っておったわけです。

そんなわけで暫定的なものであれ、いわゆる今出川中心思想といえますか、今出川が中心であるという考え方が根強くあるとすると、これはどうしても出先機関化してしまふ。そうなればマイナスの面だけが目だつてくる。そこで少なくとも教員の研究室をむこうに移すことによって充実をしなければいけないというふうに私は考えておりますし、そのためには、そっちに研究室を移す先生方に対する配慮というものを十分大学はしていただきたいというふうに思っておるわけです。

濱田 たしかにおっしゃるとおりに一、二年が田辺、三、四回生がこちらということになりますと、二拠点のデメリットが出てくるわけですが、土地の広さから考えてみますと御所が二十万坪で田辺が約三十万坪、大変な広さですが、問題はお金です。将来、学部教育は田辺、大学院教育はこちらでやるというような形が望ましいかもしれません、そこまでのぐらゐの道程があるのか。また、科目の運営責任体制と事務組織の確立が大切であり、これが中途半端になったり、分校化し

てはいけないということです。女子大学の場合新しい短期大学部をおつくりになるわけですが、これは私どもの大学の場合と大分違いますので、小林先生のほうからお話を聞かしていただきたいのですが。

女子大短期大学部の発足

小林 現在は私、英文科に属しておりますが、来年の四月に短期大学部が開校いたしますと、新しい先生方のおいでになる。新任の先生方だけでは短期大学部の運営がスムーズにいきにくい面もあるだろうということ、現在の女子大学のほうから何名かが当面、短期大学部の準備に参るわけです。その一人でございます。

したがしまして、新しいものをつくるという面と、女子大が先ほどお話がありましたように六十三年から一年生の授業を田辺のほうで行う、その両方の要素がかみ合っておりまふ。来年の四月に短期大学部が開校するとともに音楽学科が移転いたします。一方、英文科も、家政学部も、六十三年から一年生の授業が田辺で始まり、六十四年度には二年生も移る。そうしますと来年四月からの数年間

というものと、それから六十四年以降、そして最終的に先ほどお話のありました全学移転と、それぞれの段階に応じた問題点あるいはやり方などが出てくると思います。

まず秒読みの段階に入っております短期大学部のほうですが、英米語科が二〇〇、日本語・日本文学が二〇〇、合計四〇〇名を予定しております。英米語科の方から申しあげますと、内容的には現在の女子大の英文科とは若干性質を異にする部分があります。文学を中心にした研究という面よりも、もう少し英語のプラクティカルな面といえますか、そういう面を二年間でできるだけ鍛えていきたい。一方、日本語・日本文学という名称自体は非常に新しいと申しますか、やや異様な感じもする名前で、国文学という名前をつけなるところに一つの意味があると申し上げたいと思います。とくに現在あちこちで言われておりますけれども、日本語・日本文学というものをもう少し広い見地から見ると、たとえば海外における日本文化の受容、あるいは日本語教師養成、そういう方面のことも視野に入れた学科をつくっていきたい。したがって、英米語科あるいは日本語・日本文

学と学科は二つに分かれておりますけれども、めざす方向は最終的にはオーバーラップしてくる部分があるのではないかと思いません。

短期大学部を新しくつくることに関しては、かかわっている側からすると、不安感と同時に、何か新しいものをやれるという期待といえますか、あるいは若干語弊があるかもしれませんが、いままでのシステムとか、現在あるような方法とは少し違った新しい観点から、いろんなことがやっているのでないだろうか、という期待感があります。

まず不安感については、周りの方からいろいろ問題を指摘なさる方がいらっしゃるわけですが、たとえば田辺という場所が話題になっております。しかし短期大学部だけのことを考えると、今出川から移ってくるわけでもありませんので、田辺という場所に初めて短期大学の学生は入ってくるわけですから、そこがいつてみればついの住みかみたいなものになってくる。そういう学生たちが二年間を有意義に過ごせるような環境づくりをやっていくことがわれわれの使

命であると思っております。

先ほど濱田先生がおっしゃった、学生が自主的にいろんな活動をしていくような面も、当初からすべてのことはできないとは思いますが、できるだけカリキュラムに余裕を持たせて、学生のほうで自主的な活動ができるようなものを考えてやりたい。

それから何と申ししても二年間ですのでも、短期大学のイメージというのはどうしても詰め込みという感じがある。しかしできることならば、少しゆとりを持たせて課外講座などもいざ実現させて、その中で現在必要とされているような情報処理であるとか、そういう面のこともできないであろうか。授業の中には情報処理という科目を選択科目で入れておりますので、情報処理室という部屋もあって機械も置きます。ですからそういう新しいものを、できるだけ学生が使いこなしていけるようなものができればというのが、少なくとも現在かかわっている者の一つの大きな希望でございます。

有無相通する相互協力を

濱田 従来の国文ではなく、日本語・日本

文学科という名称が使われ、現在の英文科とは違った特色を出すため英米語科を短期大学部に作られる趣旨がよくわかりました。

さて、田辺に行くこと教職員の負担が重くなりますが、増員も財政との絡みでままならぬと思えます。この点で心配になるのは非常勤確保の問題です。現在ですと京都の他の大学との掛け持ちが容易ですが、田辺まで足を運んで貰えるかどうか。樂觀的な見方をしますと奈良、大阪からは来ていただき易くなるということですが……。これまで高校、大学、女子大の間である程度協力し合ってきたのですが、どちらかと言うと大学側がお手伝いいただくほうが多かった。同志社内の学校へ行くのと他所の大学へ行くのでは非常勤手当に差があり、行きたがらないということ聞いたことがあります。今後お互いに有無相通する形で協力し合わねばならぬのですから、マンパワー活用の点から、そのような格差は無くした方がよいと思えます。

山本 国際高校では選択科目の時間―たとえば聖書特論の時間―がありまして、それは専任教員が自分の時間として持っているのですが、そこへ大学の先生方に年間何時間かか

リキニラムを組んで時間講師という形で入り込んできていただいて、聖書特論なら聖書特論の学習の内容を何人かの先生に分担していただく形をとっているんです。社会学でもそれができます。社会学の中で国際政治論などの大学の複数の先生方に来ていただくということや、通じての、その特論の責任ある担当者として来ていただくのではなくて、そのような形で来ていただくということを昨年度からやっています。

濱田 貴重な人材が同志社以外の学校で使われるというのは残念ですからね。

山本 こんど大学と女子大が、たとえ一年生と二年生だけということであるにしろ田辺においでになるので、そういうことでお手伝いしていただける機会が多くなるんじゃないかと考えています。ですからあつかましくどなたが、田辺にいつどのようにおいでになるのか、それを早く知りたいたいです(笑)。できたら来年度からそういう形でどんどんお願いしたい。そして国際高校でやっていることを大学の先生にもご理解いただきたい、女子大の先生方にも知っていただきたい。ただ

礼拝のときにお話しに来ていただくだけじゃなくて、もっと中へ入り込んでいただきたいと考えているのです。

濱田 大学の一般教育担当の嘱託の場合、一般教育委員会で資格認定を行うわけですが、修士修了三年以上が条件になっています。ただ、例外として、専任の担当者が授業の一環として学外の専門家をゲストに、例えば宗教の問題でお坊さんをお願いするというようなことはいままでもやっております。また、「現代文明とアメリカ社会」という科目ではAKPの学生を招き、アメリカの大学生活について話してもらい、うちの学生とディスカッションさせる試みも行われています。今後は先生のところの帰国学生と自主的にいろんな交流が行われるだろうと思えます。

山本 大学の先生方で中高の免許状を持っておられる先生もいらっしゃいます。それから正規の普通免許状をお持ちでなくても、大学の先生の場合ですと府教委に申請いたしますと、二年間に限っての臨時教員免許状が交付されます。ですからほんとに大学の先生方のほうで、中高の教育を一年間くらいみてや

ろうというお考えがあれば、いままでは中高のほうから大学のほうへ嘱託という形で多くの方々が出て行っていますが、逆に来ていただけるわけです。大学の先生方がお忙しいからちょっとむづかしいと思うのですが、もしそういうご配慮がいただけるのでしたら、田辺へ出向いてこられる一日のある時間に、それこそ講師というふうな形じゃなくて、特論のある一つを国際高校の非常勤講師として担当してやろうという形でしてくださるのも、けっこうしてできないことではないのです。

濱田 四年制同士あるいは二年制とうちとか、いろんな交流が考えられるだろうと思うのですが、教育の面だけでなしに研究の面でも交流が盛んになればありがたいと思っています。

山本 とくに帰国子女についての理解をしていただくうえで、同志社国際高校はほんとにいい場所ではないかと思うのです。少なくとも毎年百五十人前後の帰国子女といわれる生徒たちが、既存の高等学校から上がってくる生徒たちとは違う生徒たちが大学や女子大にお世話になるわけですから、それを知っておいていただくためにも、おいでいただけた

らけっこうかと思うのですが。

濱田 大学に受け入れてからも、帰国子女が他の学生に良い刺戟を与えてくれればと願っています。

日本の体操教育もアーモストが故里

さて話はいかかりますが、アーモストと体育との関係について御紹介したいことがあります。アーモストへの初期の留学生と言えば、まず新島先生、それに内村鑑三、神田乃武の名前があげられます。この三人は第四代総長ジュリアス・シーリー先生から人格教育を授けられ、絶大な感化を受けた。シーリーは古典だけでなく、自然科学、そして体育を非常に重視した。新島先生がバッチェラー・オブ・アーツでなく、バッチェラー・オブ・サイエンスを取られたのも故なしとせずです。同志社の先輩で英学者の手塚龍磨氏によると、アーモストはいちばん小さい田舎のカレッジであったけれども、アメリカで最初にジムナジウムを作った学校です。そういう点で知育、徳育、体育の三つを重んじていた。アーモストの科学・博物の先生で二代目の総長になったエドワード・ヒッチコックの息子エ

ドワード・ヒッチコックの名前が同じですが、が体育主任をしていた。新島先生がアーモストを終えアンドーヴァに在学中の一八七一年に岩倉ミッシェンがアメリカに参りました。その時随行した田中不二磨が新島先生の案内でアーモストを視察し、スウェーデン式体操を見て感服した。当時の日本では剣術、柔術、女子のなぎなただけで、いわゆる近代的な体操はなかった。日本人の体位の劣っているのを憂えた田中不二磨は、日本に帰ってからアーモストに体操教師の派遣を要請、ヒッチコックの弟子、ジョージ・A・リーランドが送られ、体操伝習所が開かれた。これがフィジカル・カルチャ（体操）日本導入のいきさつです。

仲村先生、市街化調整区域の開発許可がいつ下りるのか見通しはついておるのでしょうか。

仲村 まだちょっとついてないようですね。

濱田 計画通りの施設ができれば学生の意識もずいぶん変わらぬと思うのですが……。

仲村 先ほど申し上げましたようにまず計画どおりやっていたきたいし、またいただ

けることだと信じております。それができましたら、商業施設だとか公共の施設のお世話にはならなくてすむ。もちろんいまのカリキュラムを前提に置いての話でございますけれども。また課外体育のほうも施設は相当充実します。いままでですと課外活動といいますが、体育会あるいは同好会とかの活動の場が今出川にはまったくないんです。ですから一般の学生諸君はもし正課以外にやろうとすると、御所でキャッチボールをするとかソフトボールをするとか、それぐらいのことしかないわけですが、ところが田辺では多くのスポーツが自前でやれるわけですね。ですから、たとえば体育会の活動のみが課外体育であるというような図式は薄くなるだろうと思いませんね。正課でやったことを、その施設を使って一般の学生がどんどんやれるようなシステムを考えなくてははいけないだろうと思えます。

ただし、その場合にむつかしいのは、いままでの体育会がやっていたこと、めざしてきたこととどこでバランスがとれるかというところで、専門化にも対応できて、なおかつ一般化にも対応できるという、そういう欲はった

考え方でやらなくてはいけないだろうというふうにしてありますね。それともっと欲ばれば教職員等を含めて、空いている施設をどんどん使ってもらって、というようなことも考えております。ただそれがそのとおりのまいくいかどうか。特に施設をどう保持していくかという問題がありますね。これは体育会を中心に責任あるところにその管理をゆだねるほうが、うまく保持できるだろうと思えますね。

濱田 女子大学は以前から体育に田辺のグラウンドを利用してこられたのですね。課外だけですか、あれば。

仲村 私のお聞きしているのは課外です。先ほどの交流の話ですが、いまでも大学と女子大の交流というのは、同好会とか愛好会とかいう形でなされています。田辺に行けば更に交流が進むと思います。

濱田 女子大は体育館棟の建設を計画されていますね。一般教育の体育はもちろんあちらのほうでやりになるのでしょうか。

今城 はい。

濱田 これからは大学が大きな施設を持つことになり、いままでずいぶんよその施設に

ごやっかいになることがあったのが、おそらく今後は逆に期待されるのじゃないか……。

今城 それはぜひ期待させていただきたいですね。

前川 本音とたてまえは非常にむづかしいですね。地域についてはすでに五十五、六年ぐらいから覚書で、地域のために開放するみたいないことを交わしていますが、その点どういうぐあいに対応していくか、しんどいところですね。

仲村 一つには国体を控えますからね。国体のときには必ずそういう施設に対する要求は地域から、とくに田辺町から出てくるんじゃないでしょうか。その場合お使いいただける余裕があれば結構なんですけれども、大学内のみでも体育会、同好会、愛好会というのがあります、それが全部そこでどんどんやるとなると、相当困難がありそうです。

新校地と一般教育

濱田 話を大学に戻して恐縮ですが、先ほど前川さんから説明があったように、研究施設が機能的・有機的に集中するということが、一、二年次の専門基礎と一般教育が田

辺で行われるわけですが、一般教育の場合、不完全縦割りの本学では、横割りの教養部、東大教養学部、広島大学の総合科学部、あるいは一部の大学の学芸学部に見られるような一般教育専任者の共同研究体制が整っていない。専門の先生が兼ねておられる宗教学以外の人文分野、それと社会分野以外の一般教育と外国語、保健体育は、確かに分野毎にまつまっておられる。研究室も自然、英語、体育はそれぞれ集中していますが、第二外国語は分散している。狭い校地でやりくりしなければならなかった結果こうなったのでしようが、各分野が物理的に離れているために、相互の連絡が稀薄であった。一般教育共通の機関誌さえなかった。新校地では共同研究体制がおのずから生まれるものと大いに期待しています。同志社大学の一般教育は、教員と学生の学部所属のいかにを問わず全学共通のカリキュラムで行われていきますので、同志社の教育理念が最も実現し易い場が保証されていると思います。

樋口 昔から同志社大学は、先ほど濱田先生がお話しになったアーモスト大学を引き合に出して、リベラルアーツの伝統があると

いうふうなことを歴代の学長も言ってきた。いうわけですけれども、ぼくはどうしても理解できないのは、アーモスト大学というかアメリカの持っているリベラルアーツと同志社が考えているリベラルアーツというのは、もう根本的に違うんで、同志社の場合にはリベラルアーツというと、一、二年の授業あるいは一般教育の授業というふうに考えているようにですけども、たとえばアーモスト大学のようなああいうカレッジは、ご承知のように大学院を持たないことにむしろ誇りを感じているわけです。ところが同志社の場合ですと、やはり六学部というものがまず前面に出てきてると、そこでつけ足しのようにいつもリベラルアーツ、リベラルアーツと言うんで、それが田辺に移る、それもリベラルアーツの分野だというふうに一般的には考えられがちなんです。ぼくはそれが実は不満なんです。

しかし先ほど申しましたように、六学部制の体制の中での当面の改革案といえますか、対処すべき体制を考えてくれというふうに、われわれ、私が委員長になった委員会では考えてきたわけですから、どうしてもその枠を外して考えることができない。そうすると濱田先生がいまおっしゃったように、よその大学のたとえば人間科学部であるとか、総合科学部であるとか、あるいは人文科学部であるとか、新しい学部構想というふうなことは、われわれのらち外であつたわけです。したがって、消極的ではあるけれども、基本条件、研究条件が悪くならないように、少なくともそこを当面であっても充実するためにはどうしたらいいかということ、実は考えてきたわけです。

ぼくはもしほんとうに同志社がリベラルアーツを重視するというのであれば、新しい大学院をどんどんつくったり、六学部制の維持とかいうふうなことはあつてほしくない。先ほどの小林先生のお話を聞いていて私は「うらやましいな」と思うんですけども、新しく出発をするという意味です。これは全く夢が持てるんですね。ある面ではリスクがあるんですけども。ところが、たとえばわれわれの研究室を向こうへ移すという場合も、いまの枠内で考えたときにそれが研究体制にとつてプラスになるかどうかというところ、マイナス面のほうが非常に多く出てきてしまうわけですね。そうするとちゅうちょせざるを得ない。しかし、われわれとしては行かないということになると、学生は一体どうなるんだ。だれも教員が向こうへ研究室を持たなくて授業だけ向こうに行くというふうなことが、大学にとっての教学体制にプラスになるのかどうかということから考えますと、これは、たとえ少し条件が悪くなったとしても、われわれががんばろうじゃないかということ、私には言わざるを得ないという状況なんです。

濱田 でも、たとえば共通の機関誌がないのはある意味では、研究室分散などのため生まれるべくして生まれなかつたような面があるんじゃないかと思えます。まあ同志社にはいろんな特殊な状況があり一朝にして解決できないということだと思えます。でも、何かやっぱり期待を持ちたいですね。

樋口 これはたとえば女子大の場合と私達うと思うのは、もちろん規模も大いに関係してくるんですが、各学部の研究室というものがある意味では非常に大きな障害になっている。中央図書館というものが同志社の場合ですと、学生用の図書館というふうになっているわけですね。かつて女子大との交流の

中で図書費のむだを省く方策を話し合ったことがありますが、現実にはなかなかさういうことが行われていない。いまわれわれが向こうに研究室を移した場合にどういう障害が出てくるかという、途端に資料の障害ですね。資料の利用というものがいまのようにできない、どうするんだという問題が必ず出てくるわけです。これが中央図書館的な形で図書の利用というものが行われていたとすればそれほどそれが大きな障害にならないかもしれません。

前川 樋口先生、研究図書の相互利用の問題、これは非常にむづかしい問題だと思いません。特に同志社大学の場合、トータルに全学的に見て図書の相互利用という、特に学部間の壁を破って相互に利用するということがむづかしい状態になっていますね。

話が飛んで恐縮ですが、アメリカカの図書館事情ですね、アメリカのほうでは二十年前ですが、ナショナル・プログラム・フォア・アキュイジション・アンド・キャタログング（全米収書目録）略称N P A C（エヌパック）ができ、一九六五年の高等教育法にもとづいて、議会図書館が、各大学図書館、公

共図書館、研究諸機関等の協力を得て、集中収書、集中整理をして、目録データをすばやく提供するシステムを実現させる計画をたてたわけですね。その上で電算化していますから、非常に軌道に乗っているわけですね。

で、日本の場合それをしていないんですね。私は当時、図書館にいまして、そのときに国立国会図書館長との懇談会があって、アメリカのこのエヌパックを日本ではやる気があるのかということ聞いたんですが、「日本ではとてもできません」というような返事をもらってがっかりしたことがあるんですけども。実際そういうことを抜きにして、標準化とか電算化をしていますから、図書の目録データの把握とか、相互利用等の面で障害をきれいに取り去ることができないわけですね。

だからそういうような地ならし、標準化や均等化がなされておれば、女子大で同じ図書を整理したり、大学で同じ図書を同じように整理したりしなくても、共通の目録データを得ることができるとです。そして例外的な図書だけを整理するというような、非常に合理的な整理の仕方なり利用の仕方ができるわけですね。そして、アメリカの大学の図書館の

事情をいままら言うまでもないと思いますけども、全学的に中央図書館があって、それぞれ研究図書館が各分野ごとに分かれていて、それを中央図書館がまとめているというような形で、非常にうらやましく思うわけですね。

最近、関西大学が、研究図書を含めて全学的に統一されたような形で大きな規模の図書館をつくりましたね。だからあれを見ますと、同志社の場合、非常にむづかしい事情にあるみたいに思うんですけどね。

濱田 アメリカでは図書館学がサイエンスと言われており、全て体系的、科学的に処理されていて羨ましい限りです。ところで女子大学の一般教育では、いまのような問題はございませんか。

小林 一般教育担当の先生方の集団がありますね。現在研究室がありますのは梨木という所で、今出川と若干離れております。ですから一般教育の授業などはその梨木の校舎のほうで行われることが多いわけです。ただ、やはり六十三年に一年生、そして六十四年に二年生となりますと、一般教育担当の先生方は田辺が中心になります。それから女子大だ

けをとれば、田辺の方が学生数としては多くなるわけですから、そうしますと樋口先生がおっしゃったように、今出川のほうに研究室があつて田辺には出向という形はやはりとれませんので、むしろ田辺のほうがメインになるかも知れません。

図書館というのはかなり先のことになりまして。当方は図書室というような規模のもので、研究という面に関してはかなり不便なものでできてくる。そこで現在より条件があまり悪くならないような形でということ、毎日定期便みたいなものを出しまして、必要な本は田辺と今出川との間で移動させるというようなことも考えられているようです。

当初は不便だと思いますが、逆にこの機会に、同志社全体で、一つの雑誌が五つぐらい取られているというようなことはどこかできちっと整理できたらという希望をもっています。

それから、短期大学の準備を進める中で大きな問題は、先ほど濱田先生がおっしゃった非常勤の先生方の問題。今出川に来られるよりも田辺に行くほうがむずかしいという方

もいらっしゃる。その点で、田辺キャンパスの中でお互に協力しなければならぬと思ひます。

現在女子大の学年暦では七月の九日ぐらゐに夏休みになり、九月に試験を行う。ところが共学の方は、七月中に試験を終えてしまふ。非常に細かいことなのですが、そういう学年暦がちよつとずれているということだけで、非常勤の先生方の手配でもかなりむずかしい問題が出てくるだろう。だからこの機会に、ある程度整理できる部分もあるのではないか。ある意味では一つのいい機会だろうと思うんですけれども、その辺がうまくできるかどうかというのは、やはり非常に大きな問題じゃないかと思ひます。

濱田 そうですね。

小林 たとえば、短期大学の準備にかかわっている方としては、短期大学部のことに關してはある程度目を配ってやっていきますけれども、最終的には、計画全体を見ている人の適切な判断が欲しい。その部分で大所高所からできるだけ調整をしていたきたいわけです。

それから、私の属しております英文科の場

合ですと、英米語科という学科が短期大学部にできる。授業の内容は違つていても、両者は、人的な交流をする。つまり一体のものであるという考え方ですので、短期大学部と女子大と全く切り離すというものではありません。それではどういう形で教員の人事交流をするか、具体的な面での詰めと申しますか、そういうようなこともこれからやはり非常に大きな問題になるだろうと思ひますね。

濱田 外国語は幾つオファされているんですか。

小林 フランス語とドイツ語と、それから四年制ではイタリア語ですか。

濱田 イタリア語？

小林 イタリア語は音楽学科だけです。一般教育の問題というのも大問題でして、たとえば音楽学科の一般教育をどうするのか。これは、今出川のほうではもちろん六十三年まで一般教育の授業を当然行っているわけですが、ところが音楽学科に關しては田辺のほうで授業が行われる。その一般教育をどうするのか。人員の問題とか大変な問題があるんじゃないですか。

音楽学科の充実

濱田 ところで、音楽だけが移られる特別な理由は何ですか。

今城 実は当初は全学同時の移転という形で検討が進められていたんです。時期としては、先ず六十一年を目標にしましたが、これは時間的に無理がありましたので六十一年ということに改め、具体化に取り組みました。一方、音楽は従来から抱えている課題の解決に力を注いでいましたが、先に申しましたように、文部省で定員増の受理を拒否されたので、止むを得ず、カリキュラムの改正について先ず実施致しました。この背景には、社会的な強い要請ということがあります。例えば、女子大には立派なパイプオルガンがある。立派なパイプオルガンがいらっしやる。にも関わらず、オルガニスト養成の場が無い。是非、受け入れの場を作って欲しいとか、従来のヴァイオリン専攻を充実させる為にオーケストラを作れとかいう声が強かったのです。それで実員増は田辺移転の実施と同時期に廻して、二十五名の定員の中で七つのコースを作りました。学科としては、多様化

をねらっているのですが、現実には細分化といううな……。

浜田 そういうことですね。

今城 ものすごくやり難い面が出て来る。入試も今迄定員が少なくて、受け入れ体制が不十分といわれていたのに、それが細分化で今迄以上に難関になったのではないかとされる。一方で学生は学科全体としては当然定員が増えて来ます。設備も女子大キャンパスの中に狭いながら多少のスペースはありますので、そこに小さい建物を建てて、応急的な対策を考えるとということはお出来たのですが、これは勿論、基本的な解決にはなりません。又、音楽だけが今出川に残るということはとても許されませんでしたから、建てたとしても無駄になります。それで音楽としては六十年移転のタイムスケジュールに合わせて学生を取って行ったのですが、実行委員会の検討でそのスケジュールが六十一年移転ということになり、更に全学移転には膨大なお金が必要なので、これを年次計画に改め、英文、家政は移転を六十三年に延期することになったのです。音楽は六十一年でもパンク状態になった所でしたから、これ以上移転延期は出来な

い。英文と家政だけが延期することになった点に対しては、非常に強い動揺と反発が起り大もめになりましたが、最終的には止むなく、音楽だけが計画通りに六十一年の移転ということになったわけです。

濱田 そうですか。

今城 それともう一つよろしいですか。

濱田 ええ、どうぞ、どうぞ。

今城 話が長くなって申し訳けないんですが、女子大学は同大に比べて小さい規模の大学です。学生数は二千七、八百ですから、これを二つに分けるとむしろデメリットの方が目立ってしまう。今、小林先生が色々指摘しておられたようなことを一つ取り上げても問題として出て来ます。だから当初、この田辺移転を計画し、色々と検討を進めて行った時に、同志社大学と合体する形で田辺移転というものを考えられないか……。例えば、家政学部は一部が理工学部と、残りの一部が文学部と合併する。英文は当然文学部に、音楽は独立させて芸術学部を作る、というような構想ならば意味があるが、現状のままで二分するのは無理があるという意見もございました。

濱田 なるほど。

今城 にもかかわらず、結局移転に踏み切ったのは、最初に述べましたように、在来の課題の解決とか、将来展望のためですが、この将来展望についての、裏づけになり得る材料として、我々の永年にわたる検討から見れば極く最近、しかも何の脈絡もなく出て来たものではあります。関西学研都市というプロジェクトがありますね。たとえば音楽なんかですと、田辺に移転した場合に、どうしても文化的な環境から遠ざかる。コンサートのこと一つ取りあげて見ても、この今出川にいれば、学校の授業が終わって音楽会に行けるといふような、地理的にも恵まれた条件なんですけど、田辺へ行くと、それが不可能ではないにしても不利になって来ます。そういうところがネックになりまして、音楽の中でも意見がいろいろ分散していて、なかなかまとまらなかつたんですけれども、その学研都市構想の中に、これはまだ単にプランの段階であるにしても、国立の総合芸術センターであるとか、第二国会図書館、それからこれは音楽には関係ないですけども、国際交流研究所であるとか、そういうものが矢継ぎ早に打ち出さ

れている、そういう状況から考えて、これは、同志社だけでは絶対不可能な文化的な環境整備、あるいは都市づくりというようなものが可能になっていくと、そういう裏づけがある以上は、ある種の困難を乗り越えてもやはり田辺に夢を向けるべきだ。新島襄が一番最初に学校を開いたときには当然イバラの道だったわけですから、それに比べれば、現在われわれが田辺に移るといふことのいろいろな困難な面というのは、比べればの話ですけど、容易に解決できる可能性があるんじゃないかといふようなことで踏み切ったわけですよ。

濱田 そうですか。よくわかりました。

音楽学科がいろんな困難があっても、なおかつ遠い将来への展望を持ってあそこへお移りになる。今後向かうべき方向を見きわめ長期の計画を練らなきゃいけないということですね。

私のほうの大学では人文の中で芸術はありますけれども、音楽はありません。文学部は特殊かもしれませんが、うっかりすると女子大と間違っただけで女子学生が多く、音楽に力を入れろといふ声もありますけれども、

なかなか男子学生中心の面が強うございませう。音楽科が移られることは非常に力強いことだし、うちの学生がいろんな意味で恵みを受けることと思います。

日が暮れても安心な対策を

樋口 先ほどのお話の中でぼくが一つ心配なのは、学生同士の接触というものが、一、二年生だけ。その上、教員との接触も少なくなるということになりますと、これはもう学生にとってはそれこそマイナス面が非常に多くなる。そのため、どうしてもわれわれ学生との接触を何とか少なくならないように努力をしなければいけないんですが、そこで、これは前川さんの領域じゃないかもしれないけれども、たとえば今出川ですと、二部があるために事務室が九時半までやっている。ところが向こうへ行きますと四時で終わりということになりますとね、これ、教員も家が遠くないので帰る、授業だけでさっさと帰る、職員も四時に終わってすぐ帰る、図書館も四時でおしまいということになりますと、これ一体大学といえるんだろうかという疑問が出ます。実は、まだそういう点にまで議論がいつ

てないとは思ってあげても、これはやっぱり何とかしてもらわないと。たとえば、残る学生が少なくとも図書館や事務室は開いてるんだということがないと、非常に寂しいキャンパスになるんじゃないか。

特に女子大の場合ですと、——これは私が心配する必要はないかもしれないけれども、音楽なんかの場合、夜遅くまで練習する。そうなりますと、一つの解決策としてはたとえば六時以降とか五時以降になりましたらキャンパスの中をバスがぐるぐる回って、遅れている学生、そこらの学生を全部拾って駅まで送るとか、何かそういう手だてを考えた方がいい。課外体育の場合練習は八時までよろしい、だけれどもだれもいませんよということでは、やっぱりまずいんじゃないか。この辺も法人として考えていただきたいと私は思うんですね。大学だけとか女子大だけとか、あるいは短期大学だけとか各科だけというんじゃないですかね。前川さん、何か意見がありましたら。

前川 大学の授業時間割の時間帯が、七月十八日の大学評議会で決定しますね、それを見ますと、休憩時間が五分いままでもより

も延びて、そして昼の休憩時間が現行四十分が二十分延びて六十分になっていますね。いままでですと四講時が四時で終わっているのが四時半になって、三十分延びてるわけですね。必須科目についてはできるだけ四講時の中でおさめていきたいといわれていますが、免許資格関係とか選択科目等のうち、どうしても四講時の中に入らないものについては、五講時に持っていくというような形で、まあ五講時まで組んであるわけですが、現行ですと五講時が五時四十分で終了ですが、それが改正では六時十五分になっているわけですね。

青山学院が開校したとき、厚木はいまの田辺どころじゃなくて、周囲に民家が一軒もないというような寂しい所で、頼りになる交通手段としては路線バスだけ、満杯乗せても八十人ぐらい、それで輸送するわけですので、これだけの人数に絞ってくれというバス会社からの要求もあって、時間割は五こま組んでますけれども、実質は四こまなんです。だから早出組と遅出組をつくって、例えば月水金一講時から四講時まで入れるとすると、それから火木土について二講時から入れると

ると、これをミックスした形で一講時から五講時まで組んでるわけです。そうすると五こままでいきますと、遅出の場合ですと六時ちょっと過ぎたわけです。夏場ですと非常に明るいですが、冬場になってくると非常に暗い。結局、四時半から五時ぐらいいなってくるって暗くなってきた、六時ごろになると真っ暗ですわね。青山学院も女子学生が同志社と同じように多いところですから、そういうようなことで父兄のほうから学校のほうに苦情があつて、もっと早く終わるようにという要望が出てきたわけです。そういう懸念が同志社の場合なければよろしいですね。五講時まで授業をした場合六時十五分ということになっておりますので、その点どういう状況になるかわかりませんが、青山学院の例から考えると多少そういう懸念がなきにしもあらずと思われまます。

それと、確かに現在でも新町キャンパスには、先生の研究室もございませんし、そして職員の仕事もいまのところはありません。あるのは教務部の教授控室と視聴覚関係だけということですね。だから、そこへいまでも学生がよくいろんなことで相談に来るらしい

ですね。田辺キャンパスでも、さっき樋口先生がおっしゃったように、もし四時で職員も先生方もお帰りになれば、学生としては相談相手も何も無いという形になってくるわけです。職員のほうは、一応図書館は四時で切るといよりも時差的に、開校当初は六時ごろまで、その結果を見てまた時間変更になるかわかりませんが、いまのところは六時ごろまでとか、それから教務関係については、窓口としては時差で四時半か五時かちょっとわかりませんが、それぐらいは延長する可能性はあると思います。そういういろんな手だて、それは考えていかざるを得ないんじゃないかと思えます。だから、予期せんことが起こってくださると思うんですよ。

濱田 そうですね。

前川 よかれと思っただけという時間割の時間帯が組まれたわけですが、たとえばキャンパスが広くなって体育施設も西のほうに広がっている。学生の移動のことも考えて、休憩時間も五分ずつ増やしたり、今出川キャンパスですと、学外でも食事に行くところがあるわけですが、田辺キャンパスではいまのところないし、キャンパスの中だけということでは

四十分から六十分という形で延長されたのではないかと思えますけれども、われわれの判断を超えるいろんな要素がこれからどういふぐあいに出てくるかということですね。

濱田 田辺と今出川の両キャンパスは距離的によそよりは近いとはいえ、田辺には新しい図書館もできることだし、距離を克服するために、コンピューターを大いに利用すべきでしょうね。

樋口 そのコンピューターが田辺に三十台ですかね。

前川 GSSは向こうは五十台。

樋口 五十台が設置されるんですが、問題は、そのコンピューターを使ったほかの授業ですね、つまりコンピューターというコースじゃなくて、コンピューターを使っただけとえば外国語の教育であるとか、ほかのカリキュラムであるとか、そういうふうなことができないだろうかということでは実は四人ほど先生に、本格的にやってくる大学を見学してもらったんです。帰って来て聞きましたら、とてもだめだ、同志社はある金はとても出ないからこれはもう提案すること自体やめようという、それは金沢のある大学ですけども、本

格的な設備を持つと、そのためには膨大な予算が要る。しかしそれをもあえてやった大学と、曲がりなりにも五十台の端末機を入れるというのでは大違いだから、とってこそこまでは望めないという話が出てましたね。だけれどこれは予算の関係でやむを得ないことではないよりは、端末機であれ、あるにしたらことはないんですよ。そういうコンピューターの利用も、予算の裏づけがなければとても話にならないわけで、それは今後に期待することでしょうね。

今城 先ほど樋口先生がご提言になっておられた治安管理の面ですけれども、この点については現在何か具体的に検討しておられるんですか。

前川 治安管理については、キャンパスの中ではガードマンを考えるとというぐあいに。まだこれ大学としては正式には決定してません。そういう方向で考えてますけどね。

濱田 開放的なキャンパスですから事前にいろんな工夫、手だてが必要ですよ。

下宿問題

今城 当然そのキャンパスの近辺に下宿す

る学生がふえると思うんです。治安についての留意が必要ですね。

樋口 大学の場合ですとは田辺は一、二年だけです。三、四年はこっちへ帰ってくるから、こちらに近い所に下宿をして通うということに多分なると思うんですね。

今城 なるほど。

樋口 短期大学の場合ですと向こうが本拠、本拠というより向こうで終わるわけですから、向こうに下宿する人がふえると思う。これはもう当然のことですね。

私、実は、まだ校舎ができる前にも何回か見学に行きました。それから校舎ができてあるところも三回か四回。行って見てわれながら来てよかったと思ったのは、何もなしとくに予定を聞かされて「ああこうなるんだ」というのと、実際に三分の一ぐらいの建物ができかかってきているのを見たときの印象というのが、まるで違うんですね。それでこの前も、校舎がかなりできてきたから、向こうで研究室を持つかもしれない先生方と見に行ってきたんですがやっぱり同じことを言っていましたですね。建物ができてくると緊張感が出てくるし、これはうかつことはできないと

いう気になります。

そういう意味からすると、やっぱりこれはわれわれだけではなくて、もちろん大学の中枢部の人たちも何回かそういうふうに行っておられると思うんですけども、なるべく多くの人が早く見に行つて、それに基づいていような対策を立てることが必要だと思えます。それからもう一つは、「建物ができる前に行つて見たことがあるから」という意識で田辺での教育を考えるのと、いま実際にみて考えるのでは全然違うんですね。

山本 いままで同社とは全く違う、ほんとうに大学にしろ女子大学にしろ、われわれが考えを変えて見ていかなければならないようなものがつくられようとしています。それだけにいろいろな面についてあらかじめ考えておかなければならないでしょうね。

小林 下宿のことですが、実際に短期大学部でも計画を立てる段階で、学生が一体どうい所に住むであろうかというような問題を少し考えてみたんですけれども、四年制が全部が移転するというのは大分先のことです。それまでは一、二年と三、四年に分かれる。当然三、四年になれば今出川のキャンパ

スへ戻ってくるということになると、いままでのように京都市内あたりに下宿する学生がふえるんじゃないだろうか。短期大学の場合には寮が最初はできませんので、学生はアパートなり下宿なり自宅から来る。いまの学生の志向からすると、どうしても京都市内あるいは丹波橋とか、あのあたりへ下宿する学生が多いんじゃないかと思われれます。

それから授業が何時に終わるのか、その後で課外活動をどういような形でやっていくのか。いまのお話を伺つても、課外活動をするためにはある程度時間が必要なわけで、その時間がいまのような環境の中で果たして十分あるのかというような問題があるだろう。そういう意味でも、たとえば時間割の問題であるとか、あるいは現在行われているような方法をもう一度見直すような面も、当然出てきて仕方がないんじゃないか。で、その面に関してはもう少しフランクな議論といえますか、あまり一つのものにとらわれないうで、実際に向こうへキャンパスができた段階でどういようなものが行われていくのかということ、ある程度目星をつけて話をしていかにことには、むずかしい面があ

る。その点で、短期大学の施設、音楽学科
移転、あるいは整備計画に關していろいろ携
わっている方たちと、当面いまはかかわって
いらっしやらない先生方、あるいは職員の方
との間での認識のギャップがかなり出てく
る。そのあたりのところは、両方の歩み寄り
というと非常に変な言い方ですけれども、や
はりお互い痛みを分け合うというのでしょ
うか、そういう面がどうしても必要でしょう。

たとえば、細かい問題のようですけれど
も、新しい先生方に十数名来ていただく。そ
の場合に、京都にお住まいでない方がほとん
どですので、そういう方々がいらっしやった
ときに、住宅の手配であるとかそういう問題
でも、新しい環境の中でずっとこれから同志
社の中でやっていただくためには、大事にな
ってくる。これだけの規模の大学で、新しく
来られた先生方が当面家を探すまでの間、し
ばらく住まいができるようなところがあつて
もいいんじゃないだろうか。そういう細かい
面の詰めみたいなものを、一つ一つやってい
かざるを得ないんじゃないかという感じがす
るんです。

試行錯誤で調整を

濱田 新しいキャンパスは、堀川通りから
川端通りまで程の幅があり、しかも、建物
がないのとあるのではまた違ってくるでし
ょうし、考えられることを十分に考えて計画
を立てられていても移ってからでないといわ
ないことがあつて、試行錯誤に頼ることにな
ると思いますね。

先ほどもちよつと話に出ました学年暦の問
題ですが、うちの大学でもたびたび議論した
ことがございます。よその大学では一番いい
時期、頭の働く時期が授業に当てられるの
に、われわれのほうでは入試が絡みますの
で、それまでに講義と学年末試験を終えなけ
ればならない。その穴埋めに真夏の七月二十
日までやるなんて、無茶だということになる
わけです。工学部は、前期の試験は九月にと
主張されます。七月に試験では講義がこなせ
ないという面があるわけなんです。ところが
文系の学部、それと特に記憶が必要な語学
は、夏休みが済んでからだ、せつかく前期
に教えたことがもう忘れ去られ、評価が果た

して正当に行われるだろう、かという声が高
く、結局、七月中旬に前期試験をやっていま
す。三校が田辺で勢揃いしたら、学年暦がバ
ラバラでは何かと不都合が生じるでしょう
ね。女子大はどうなっているんですか。

小林 短期大学部の場合には、たとえば就
職の問題がかかわってきますと、九月に試験
をやっていると、果たして就職とうまく連動す
るだろうか。できれば七月に前期を終えてし
まいたいです。しかし女子大の中で短期大
学部だけがカレンダーが違うというのはお
かしいのでそこら辺の調整が必要だろうと思
うんです。

樋口 今城先生ちよつとお聞きしたいんで
すけれども、女子大の場合進級制をとる予定
なんでしょうか。たとえば向こうへ移った場
合、一、二年生の場合に、そこで単位が取れ
なかつた者に対する処置というのは、まだそ
こまでは。

今城 いま検討中です。一つの案としまし
ては、単位が取れなかつた学生のための別の
クラスを設けるというのが一つと、それか
ら、取れなかつた学生は仕方がないから向こ
うの学校へ通わせるというようなこともあり

ますけれども、通わせるといのは物理的に非常に無理がありますので、多分一つ補講的なクラスをつくることになりました。

濱田 うちのほうでZクラスと呼んでいる再履修クラスのことですね。

樋口 私のほうでも、たとえば進級制度をとって、二年までに修了をしなかった者については、向こうに残留させるといふうなことをしたらどうかという意見もあるわけですね。これは慶応方式と仮に呼んでいるんですけれども。しかし、いまの同志社の大学の制度では、一般教育科目を一、二年で取らなければならぬということになっていません。そのためにそういう進級制度は実施不可能な状況なんです。しかし、せっかく向こうに行くんだから、それくらい厳しさにしたらいいじゃないかという意見も、かなり強くあることはあるんです。

結局どうなったかといいますと、最終的には、現在三、四回生が一般教育科目にどれだけ登録しているかという数字を基礎にして、一般教育科目を大体三対一の割合で、その一を今出川に設置するというふうに、いまは決まったわけですね。しかし、先ほどから前川さ

んがおっしゃっているように、修正をしなきゃならない要素というのはこれからたくさん出てくると思うんですね。

濱田 その点に関して京大の苦い経験があります。宇治分校で落した科目はこちらへ帰っても取れるということになっておりましたので、登録しなくても全然行かないんです。電車賃も要るわけですからね。

私のほうの大学は登録の面で非常に自由にしておりますので、それをどういふふうにして維持するか、これもやってみないとわかりません。どうしても学年進級制でやろうということになりますと、専門が取れないからということでごり押しで進級させるという弊害が出てくるかもしれませんね。

体育はどうされますか。

仲村 これはまず最初体育はすべて田辺でやるという原則を立てたわけです。と申しますのは、今出川にはもう施設がなくなるというところで、これは物理的な条件ですから仕方がないだろうということですね。ただし、あまりその原則を固守しますと他の教科とのバランスという点や体育のためにのみ田辺へ行くかざるを得ないというのが、個人にとってはた

いへんな負担になるというケースが出てくるだろうという予測がつくわけですね。ですからその考え方をゆるめて、「当分今出川校地でも行おう」ということにしています。

ただ、そうしますと、実際に正課でやれる範囲といえますか種目にしても限定されますから、むしろそのところに問題があると思います。今後は三、四年になってもむしろ課外活動としてどんどん田辺へ来なさいというような指導をして、その計画をつくらなくてはいけないと思います。

ところで先ほどからお話を聞いておりました感じなのですが、田辺移転に関して「これはいいなあ」と思っているのは、体育だけですか。(笑)これは逆にいえば、いままでいかに今出川で十分なことができてなかったかという裏返しでありまして、今出川に今回の計画のような施設があつて、ちゃんとやっておれば当然ということがありますのでね。ただ、学内で、意外と体育はうまくやっていると、体育大学をつくるつもりかとおっしゃられる向もあります。これは聞きようによっては、ある種のありがたい評価でございます。これだけのものがぜひ必要になるといふこと

で、二十年來お願いしてきて、特に歴代の学長さんはじめ、多くの先生方にはしつこいほどお願いしまして、その結果こういうところに来ておるといふことで、これはもうぜひ大学のみなならずオール同志社のご理解をいただきたいというふうに思っております。

樋口 もう一ついいですか。

濱田 はい。

樋口 小林先生がさっき指摘になりました教員の住宅のことですね。これは前川さんにお尋ねすべきだろうと思うけれども、東京の移転した大学なんかの場合には、その教員の住宅移転に大学側が融資をしているところが幾つかあるわけですね。しかし同志社の場合は、そこまで必要になるかどうかわかりませんが。

濱田 これはその目的だけじゃございませぬが、たとえば出張講義にいらっしゃいます先生の宿泊施設としてとか学生と教員の課外交流を深めるためとか、あるいは学校のお客さんを迎えられるようにといふことで国際交流センターというのが準備されるわけですね。

前川 ええ、一応予定の中には入っています。

すけれども、具体的な計画としてはまだ着手していません。

濱田 これがぜひ必要だと思っておりますねえ。

新しい同志社イメージを

前川 先生、今出川キャンパスも百年かかってやっとここまで来たわけですから、六十年四月にすべてということじゃなくて、これからまだじっくり熟成をいろいろ考えて、新しいキャンパスづくりを目指していったらいかがでしょうかね。

仲村 移転について問題点が非常に多いんですけれども、試行錯誤の中でよりいいものをつくっていく努力が必要ですね。この前の時報にたしか井上先生が、同志社大学のビジョンー私あれ非常に感銘を受けたんですが、特に田辺校地でこういう状況になったときの同志社大学全体の教職員の意識というのが、一番大事だとおっしゃっていました。行ってみないとわからないということはおそらくあると思うんです。だから、そこで前向きに勝負といたしますか、いろんなことを前向きに考えることが大切だと思えます。いつも樂觀的

なことはかり言って笑われておりますけれども、それしかないんじゃないだろうかと思えますね。

山本 国際高校は小さな学校ですが過去五年間、十年でまず基礎をつくれ、十年たって初めてほんとうの出発が始まるんだというつもりでやれということをやってきました。何をしなければならぬかということだけはつきりしています。それは中学校と高等学校六年間の帰国子女受け入れ専門校をつくるということです。そこへたどりつくまでには、いろいろなことがあります。最初に立てられた計画から比べますと、あっち行ったりこっち行ったりしていますが、しかし、そこへ向かって確実に、少しずつ進んでいっています。大学も女子大も結局そのように歩まれるのじゃないでしょうか。

濱田 教育機関でございしますので社会的な責任が重く、学生を受け入れた限りは教育しなけりゃいけない、そういう義務がございましてね、いろいろと困難な問題が今後たくさん出てくるでしょうけれども、やはりそのときそのときの絵をかいていかなければいけないんじゃないかと思っております。

山本 それから田辺では一番弱い、国際高校の立場からとくに申しあげておきたいことがあります。それは、大きなものによって小さいものがつぶされていくというのではなく、小さいものに目を向けながら大きなものが、ほんとに新しい同志社をつくってゆこうではないかということをやっていたきたいということです。

濱田 そういうことですね。田辺で芽生えるものを、大事に育てて新しい同志社のイメージを作り上げなければなりません。

时期的に考えまして、これから十八歳年齢の学生がふえ、六十七年でピークに達するということから、来年四月に田辺で開学することは時機をえていると思います。田辺に移ることによって同志社の京都イメージがうすれ、入学希望者がなくなると心配する向きもありますけれども、六十七年までの間に田辺同志社の良いイメージを定着させれば、今後の私学同士の競争に十分うち勝てると思います。そういう意味でわれわれは意識して十分それに備えていかなければいけないと思っております。

ほかに、いろいろとお話しいただくつも

りでありましたが、ほぼ時間がまいましたので、最後にお一人ずつ何か補足していただければと思います。

樋口 それじゃ最初に簡単に。私は一、二回生の田辺での授業というのは、暫定的な措置であるべきだというふうに考えています。そういうとらえ方をしています。

濱田 小林先生いかがでございますでしょうか。

小林 短期大学の準備ということでは、もう来年の開校が迫っておりますので、ぜひしておれません。そして、六十一年という、ある意味では格好の時期ですので、そこから六十七年までの間にきちっとした基礎ができれば、あとはうまく動いていくんじゃないだろうか、そういうつもりでおります。

濱田 それじゃ山本先生。

山本 きょう樋口先生やそれから仲村先生、金城先生、小林先生のお話をお聞きして、結局、これまで今出川にあったものの移転ということではなくて、ほんとに両大とも、無からの創造を目指してられるということがよく理解できました。ですから、「移転」という言葉をつかってはいけない、「田

辺開学」だというようなイメージでとらえなければいけないんだということを改めて認識させていただきました。結局は国際高校が歩んできた、歩んでいく道をこれから隣で歩んでいかれるのだということがわかって、ほんとに力強く思いました。

施設もそれから建物も何もかもほんとに広くて新しくすばらしいものだと思います。

きつとあの中に、両大学ともすばらしい中身をこれから詰め込まれていかれると思います。上にそういう二つの大学があってわれわれがあるんだという力強いものを感じながら、それだけ、責任を感じながら、これからも国際高校づくりをやってゆかなければいけないのだなあと、思いました。

それから、一番大きな問題のキリスト教主義教育、これをどのようにお考えになつておられ、どのように取り組んでゆかれるのか、しっかりと見つけさせていたきたいと考えています。

濱田 それでは、前川さん。

前川 同志社の教学理念といえますか創立者の精神といえますか、良心教育というものを標榜しながら、新しい田辺キャンパスで物

理的な面だけではなくて、そういう精神的な同志社の魂のようなものを新しく植えつけていく、どのように植えつけていくか、それは先生方の教育にもよってくると思えますけれども、そういうようなことを将来の同志社へ入ってくる学生またはその父兄を含めて、すべてがみんな希望するような形で、この同志社の田辺キャンパスで勉強してよかった、田辺へ来てよかったと何年か先には言われるように、教員も職員も力を合わせてやっていくべきではないかと思えます。

もう一つは、立地条件を考えてみますと、今出川キャンパスですといろいろ課外の、たとえば英会話を習いに行くとか、そのほか実用的ないろんなことを習いに行くにも便利がよいわけですが、田辺へ行きますと、時間的、距離的な面でなかなかそういうようなことが自由にできにくい面もありますので、できれば慶応がやってくるようなビジネススクールを、それこそ国際高校、女子大、大学の先生方有志が集まって作られてはどうかというぐあいに私は思います。

濱田 それでは今城先生、お願いします。
今城 先ほど来ひとしきり話題になった各

学校間の交流の問題です。

現在でも、同志社大学、女子大学、それから中学校、高校というふうに隣接したところで、その建物が並んでいるわけですが、必ずしも学校間交流というのは十分じゃなかった。で、田辺移転をきっかけにしまして、先ほどおっしゃっておられたように各学校間の交流というのが、人事の面でも施設の面でも十分行われる。具体的にはいろいろむずかしい面があると思えますけれども、それを何とか解消していく方向で努力できたら、ほんとうに田辺へ移った大きなメリットがそこで出てくるんじゃないかと思うんです。

それから、女子大の体育館はものすごく立派な建物だと思うんですが、ただ残念なことにグラウンドがございませんで、どのスポーツでもというわけにいかないのが非常に悲しい現実なんです。できましたら大学のほうのグラウンドなんかを、学校間交流という点からぜひ実現させていただいたら、たいへんありがたいと思います。

濱田 それじゃ仲村先生。
仲村 先ほど山本先生がおっしゃっていましたが、田辺で同志社のキリスト教主

義教育がどうなされるのか、特にチャペルの問題等、いまの時点で非常に大きな問題だというふうに聞いておりますので、そのあたりの詰めをもう一度同志社全体でやっていただきたいというのが一つ。

今城 私もこの問題には重大な関心をもっております。

仲村 それと、特に体育の場合は正課と課外と両方抱えておりますから余計に感じるんですけれども、学生の課外活動についてのおもんばかりがちよっと希薄だなという感じがいたします。学生にとってはもちろん正規の学習は大事だし、第一義的に考えるべきでしょうけれども、課外活動というのは、学生の人格形成に与える影響が非常に強いと思えます。そのあたりを田辺でどのようにしようかと、先ほど樋口先生もおっしゃいましたように、三、四年次生が大体今出川で生活の主要な時間を送ること、それから一、二年次生が田辺でということになりますと、従来と違った条件の下での課外活動を余儀なくされるので、この点に関して相当の工夫が必要だと思います。

濱田 とにかく新しい同志社を、うまく育

てるのも育てないのもわれわれにかかって
いるわけです。

最初申しましたように、学生が同志社に求
めるのは、学習の場と交流の場での成長で
す。交流の場の活性化がやはり学習の場に反
映し、相乗効果があると思えますので、新し
い設備が単に器だけに終わらず一つの触媒の
働きをしてくれることを非常に期待しており
ます。

どうもきょうはたくさん時間をいただきま
してありがとうございます。これで閉じさ
させていただきます。

(一九八五年八月一日収録、於平安会館瑞鳳の間)



『池袋清風日記―明治十七年―』

上巻・一月〜六月

(一九八五年三月刊)

下巻・七月〜十二月

(一九八五年十一月刊)

編集・発行 同志社社史資料室

明治十八年六月に、同志社英学校邦語神
学科を卒業し、同志社女学校教員、同志社
図書館司書をつとめた池袋清風が、日々の
出来事を克明に記録した明治十七年の日記
全文が、このほど翻刻・刊行された。

清風のこの日記の原本は、大正十三年に
清風の遺族から同志社へ寄贈されたもの
で、松浦政泰著『同志社ローマンス』のほ
か、『同志社五十年史』、『同志社百年史』
などの編纂の際に一等資料として活用され
てきたが、全文の翻刻ははじめてである。

学生生徒の修学、伝道をはじめ寮生活、
教員(外国人教員を含む)の動静などが、
これほど克明に記録されている例は、目下
のところ同志社には他にない。空前絶後の

リバイバルの様相(三月)、新島襄校長の
二度目の外遊への旅立ち(四月)、徴兵令
改正にともなう学内の動揺(一月〜三月)、
卒業式(六月)、彰栄館の建設(七月〜九
月)、キリスト教演説会とその妨害、その
他、重要な記録が少なくない。

清風に在学中から桂園派の歌人として知
られており、寮の彼の居室での和歌指導の
模様や、歌人との交友の記録は、近代文学
史の資料としても価値をもつものである。
この明治十七年に清風から和歌の指導をう
けている寮生には、大西祝、安部磯雄、湯
浅吉郎、三輪礼太郎、滝能武太らがいる。
文人の筆になるだけに、記録の固苦しさ
は余り感じられない。

上・下各一〇〇〇円

同志社収益事業課扱い

(電〇七五―二五一―三〇三八)まで